

【翻 訳】

ドナルド・ホールの詩

訳 矢 口 以 文

亡 命 者

一緒に遊び 話し 本を読んだ少年が
かえでの木から落ちた

彼女を愛していたけれど愛していると言わなかった
涙を流し それから忘れた

生まれ育った通りを歩いた
通りはみな新しかった

私の息子 私の死刑執行人

私の息子 私の死刑執行人
腕に抱くと
おとなしくて 小さくて ほんの少し動くだけ——
そのお前を私の体が暖める

甘い死 小さな息子 私たちの
不死のための手段
そのお前の泣き声と飢えとが
私たちの体の衰えを証拠だてる

永遠に生きるようにみえた

25歳と24歳の私たちは
お前の中に永遠に続く生命を見つけて
今共に死に始める

殺 す

羊の群が草の上を動いている
ちいさいので
小型の丸石のようだ

その時 犬が一頭
草原に水のように突入する

羊たちは右往左往する
犬は5分ほど
群の中を疾走し それから

風か洪水のように
遠くの碎石の中に入って小さくなる

詩

日中が隠したものを 詩は
夜に見つけ出す
時々それは
動物になる
夏には草原が
小川から折り返すあたりを
長い間散歩する
ある時それは 機械の

静かな列の中に立った——
一体何を
考えているのだろうか

草

草の下で、
木々の下を探る根や
石の間で、
あらゆるものが形になるか

または形を変えている。
私は眼をおおわれて
暖かい下の世界に
連れてゆかれ

水の言葉を
聞く。湿った草の
根と
共に耳を傾ける。

ロング川

じゃこう牛が
長い頭で
ボートの近付く匂いをかぐ。その
大きな姿がそこで
じっと待っているを感じる時、

白夜の中で

オールが翼になり、
木々の暗くなる
両岸に
深い森が密集する。

黒い眠りについてる
町々を通して
ここまでやってきた。
北の草や
冷たい山々を通りすぎてきた。

ボートがとまると、
たくましいやぶの中で
じゃこう牛が動く。今
過去の楽しみで
森は暗黒だ。

わにの花嫁

私の時代の時計が止まりそうだ。
猫が窓の外ですずめを食っている。
一度彼女は私に小さな兎を持ってきたので
帝政時代風のテーブルの下で
一緒にむさぼり食った
人々が金のこうもりを
取りもどそうとして金切り声をあげていた。

今 私の時計のあごひげが白くなる。
猫は暗いすみをみつめて
なくなった金のこうもりを悲しんでいる。
猫はわにの花嫁に

恋している。

ああ 小さいきれいな白い
歯ならび！ 花嫁は尻尾で自分を支え
白いレースを着て
眼の穴から
みつめる。のぼせて開いた口が
牧師や人々を笑っている。

むき出しの新しい板の上には
トマトが³14個
とうもろこしが³12本
白ワインのボトルが6本
メロンがひとつ
猫が一匹
それにわにの花嫁。

風船ガムの色をして
石油製ゼリーのようにねばねばの
意地の悪さが
左の手のひらからにじみ出てくる。
猫がそれをなめる。
私はわにの花嫁を見まもる。

みすぼらしい丸石のような大きい家々が
ゼラチンの中に
きっちり入っている。
私は白昼夢は見られない。
空は私を狙っている銃だ。
私は引き金を引く。
私の約束の頭蓋骨が
黒い戸棚の中で傾き、

乳首をしゃぶろうとして
良い口をぱくりと開く。

ゼラチンでおおわれた
家の中を小鳥がとびまわり
猫がそれにとびかかるが
逃がしている。帝政時代風のテーブルの下で
わにの花嫁が
婚礼用の経かたびらを着て横になつている。
私の左手が
中国風のじゅうたんの上にもれている。

繰り返される形

いくつかの酒場で
男性用トイレに入ったことがある
小便用の便器が
老人たちのように並び
消毒薬の
匂いが立ち込めている
小さな白いタイル
繰り返される形
避けられない白さ
彼らには悲しみがある
彼らは私の叔父たちだ
ただ配管工事をし
一晩中涙で鼓動し
朝にはまどろむのだ
この老人たちは

ケアサージ山

偉大な青い山よ！幻よ！
少年の頃 夏の間中
お前をみつめた
農家のベランダから
お前を見る。けわしい斜面、頂には
小さい平らな地面がある ——
ある日の記憶のように
お前は新鮮だ。
青い！青い！
かすみの中に
山の頂きが浮かぶ。
老いた時には このベランダで
いすを揺らすことはしないだろう。ケアサージよ、
お前に背を向けて 眼を
閉じると、お前は私の中で立ち上がる、
青い幻よ。

死んだ機械の中の男

ニューギニアの斜面の高い所に
グルマン・ヘルキャットが
止まっている、腕のように太くて
きらきら光るつたにとらえられて。1942年に
操縦士のにぎりしめた手が
誰も入ったことのない
この場所に それをすべりこませた。

操縦室には ヘルメットをかぶった

がい骨が背を伸ばして
座っている、首と肩の
かわいた腱に支えられて——
帯ひもが骨盤の十字を
いすのひび割れた皮にくくりつけ、
胸骨をパラシュートの
粗布カバーにくくりつけている。

または言ってみれば、榴散弾が
命中しなかったので、彼は
航空母艦に飛び帰った、そして朝に
なるといすに座り 蒼白な手を
黒い武器におき 帯ひもで
しっかり自分を支え 背中をのばして
前方を見すえるのだ。

す み

それは自分の名前を
知らない。湿っぽいすみに
座り、唾液が
あごからたれ、小便の臭いが
水たまりを歩き回っている。
巨大で、毛のないそれはぶつぶつ言いながらひとりで遊び、
眠り、何時間もみつめ、
とびあがっては
体を壁にぶちつける。
血まみれになってよろよろ歩き、
すみに退くが
死ぬことはない。

廃品置場

市電はあれからずっと止まっている。
運転手はいない。
終点に着いたと思っているのだ。
いや、終点をすぎている。運転手の回りは
市電の墓場だ、
数千の長方形が
互に傾き合っている、
黄色いペンキが削りとられている。
外に踏み出して、天井の穴から
煙りが出ているのに気付く。
老人たちがここに住んでいる、敷物で一杯の狭い家。
ここは最後の場所だ。

中年の恋人たち

映画館前の列を通りすぎる私たちを
若い娘たちが見上げ、
それからまた下をむいて指のつめを調べる。

ボーイフレンドたちが髪をとかしている、
私たちを侮辱するかのように
ガムを噛んでいる。

私たちは今日一日中愛し合った。
あなたを見る。歩道で
しわの寄った顔に微笑みを浮かべている。

水

石がバケツに落ちる
突然 波が
荒々しくひろがり すずの円周に
つきあたって消える

石が池に落ちる
パッと
しぶきがあがり さざ波がひろがる
水草にはばまれながら

大きくて静かな湖
石が落ちる
一時間 表面が
動き もろい

震えが続く 石は
暗い底に落ちて
湖を静穏にし
人生を生きる価値あるものにする

金

壁の薄い金 ひなぎくの
中心にある金 明るい鉢から伸びてくる
黄色いばら。一日中
私たちは大きなベットに横たわっていた。
私の手はあなたの太ものの中の
深い所にある黄金色のものと背中とをさする。

私たちは眠り 目覚め
共に黄金の部屋に入り
横たわって せわしく
ゆっくり呼吸をし
愛撫し まどろむ。あなたの手が今
うとうとしながら私の髪にふれている。

あの頃私たちは互いに
自分の中に小さな相似の部屋を作った。
墓を開くものは
一千年後に そのままの形で輝いている
その部屋を見つけるだろう。

メーブルシロップ

8月、アキノキリン草が風に吹かれて飛ぶ。祖先の墓を
見つけるために 歩いて
墓地に入る。10年前に来たのが
最後だった、その時は
台所の外の
円形の庭からキンセンカを持ったきた。
その頃まだあなたを知らなかった。
農場の家の
ピアノの上にある写真と一致する
刻まれた名前の間を歩いた。
ケネストン、ウェルズ、ファウラー、パッチェルダー、バック。
祖父の妹の
グレース・フェルトンの新しい墓の前に
立ち止まる。昨年
老人療養院を訪ねた時は、
87歳で ブルーの家庭着を着て

うなずいていた。祖父の墓は
見つからない。

今は誰も

住んでいない家のうしろをぶらぶらし、
うら側の部屋を調べてみた。
あらゆる物が休息している。糸車、
きれいな箱、キルト、
びん、本、絵はがきのアルバム。
それから懐中電灯をたよりに半地下の貯蔵室へ
がん丈な階段をおりる——暗くて
くもの巣だらけの巨大な部屋、
土間、粗石の壁、
壁の上には巨大な
花崗岩の土台があって
刻み目のはいった下枠を支えている。
かぼちゃ、りんご、にんじん、じゃがいも
の空の大箱をすぎると
びんづめ用の戸棚がある、トマトの入った
薄青のびんが
少しある、そして——これは
何だ？——シロップだ、1クォートのびんの中の
メープルシロップ、祖父が
25年前に
作った
最後のシロップ。

子供の頃、

木から糖液を採る3月に
農場に来たことを思い出す。
祖父は木製のくびきの両端に
糖液の入った桶を2つ、
16クォートもあるものをぶらさげて
肩にかつぎ 精糖所の

大桶まで運んだ。

そこで1週間

昼も夜もそれを煮つめた。

今精糖所は

ほとんど地面まで傾いている、

死ぬほど疲れきった

誰かのような。次の冬

雪が冷たい農場の家の屋根に

3フィートも厚くつもる時、

今精糖所は震え、雪と共に

地面にすべりおちるだろう。

今日

祖父の最後のシロップを

注意しなしながら

1階に持ってあがり

25年間の土を

洗いおとし ふたを

ひっぱり ほじくりあけ、硬く

乾いた密閉用のゴムを切って

あなたと私が指をいれ

その甘さを味わう、あなたは始めてだ、

亡くなった人が台所に

しまっておいた甘さを、

なくなった墓から私たちに与えられた

甘い贈り物を味わう。

※1クォートは4分の1ガロン、また1.101 リットル。

落葉をけて

1

10月、アン・アーバーで、競技からの帰途、
落葉をけて歩く、
雨もようの　すすの色を思わせる日。
70種類もある赤い色の
かえでの葉を　黄色い古新聞のように
ける。もろくて蒼白なポプラの葉。
滅亡する民族の旗のようなにれの葉。
落葉をける、落葉が長靴から
うずまきあがりとびかう時に
思い出の音をたてる。十月、
落葉のような音をたてる
コールテンの半ずぼんをはいて　コネチカットの学校へ
歩いて通ったことを思い出す。日曜日に
ニュー・ハンプシャーのほこりっぽい道で
道端の小店からりんごジュースをコップ一杯買ったことを、
1955年の秋、マサチューセッツで落葉をけり、
葉がなくなる時に父が死ぬのを悟ったことを思い出す。

2

毎秋ニュー・ハンプシャーの、田舎娘の
母が育った農場では
祖父と祖母が
秋の仕事を締めくくった。冷たい畠から最後の野菜を
取ってきてびんづめにし、根菜類とりんごは
台所の下の貯蔵室にしまった。それから祖父は
秋の最後の仕事として
家のまわりに落葉をかき集めた。
ある11月、大学から車に乗って二人に会いに行った。

夏に干し草を作ったように、私たちは大きなくま手を引いて
家のまわりに すべての側に
落葉を集めて花こう岩の土台を隠し、
そのまま動かなくするため とうひの枝を切って
落葉の上に置いた、
赤の上の緑——最後に家はくるまれて
落葉をこわばったスカートのようにぴんと
凍らせる雪を待つばかりになった。
それからハアハア息をしながら小屋の戸口に行き、
長靴とオーバーを脱ぎ、手をピシピシたたき、
台所に座り、いすを揺さぶり、祖母の
作ってくれたコーヒーをブラックで飲み、
3人一緒に黙って座っていた——灰色の11月だった。

3

戦前、子供の頃のある日曜日の昼、
父が半日で仕事から帰ってきた。
赤の上に黒のベイツのセーターを着ていた、
ホッケーのステッキが交差していた。裏庭で
一緒に落葉をかき集め、その中で笑いながら
一緒にとんぼ返りをし、笑いながら私を台所の
窓にかついで行った、私の髪は落葉だらけだった。
台所で祖母が見て微笑み、おろすように
合図した、落ちてけがをするのを恐れたのだ。

4

今日 競技を見て家に帰る途中、落葉を
けって歩く、落葉のように多くてきらきら
きらめく小旗を持った群衆の中を——
娘の髪はかんばの木の葉のように赤みがかった黄色で
かんばの木のようにすらりと高く どんどん
伸びている、15才、どんどんおとなになってゆく。息子は

かえでのようにきらびやかで、20才の大学生、
久し振りで家に帰り、前を歩いている。その足取りは
はずみ、大地の森をしきりに
旅したがっている。アン・アーバーの
羽目板の家のわきにつもった落葉の山から
二人を見守る。彼らの通った学校がむかいにある。
二人の影が遠くなって小さくなり、揺れ動いている。
しかし小さくなるのは
彼らではなくて私だ、私が初めに
落葉の中に入り、歩いてゆく、
彼らはついてくるだろう、これから毎年 10月になるといつも。

5

今年木の葉の落ちた時、詩がもどってきた。
落葉をけりながら、葉の語る物語を聞いて
死ぬ時の家を思い出し、これからそれを建てることを
考えた。かえでを見上げていたら、詩が、即ち
きらめく欲望の母音が見つかった。
亀甲金網の味のように、燃えがらのかたまりの
音楽のように冷たい何年もの冬の間中、
まぶたのない赤い眼の小鳥が
「好き、好き」と歌い
黒い頭を左右に振っていた、そして私は
詩は永遠に去ったと思いこんでいた。

6

落葉をけりながら、墓のふたをあける。
祖父はかえでの糖液の滴り落ちる 3 月に
77才で死んだ。記憶によれば父は
20年前
52才の時に 郊外にあった家で
せきこんで死んだ。おお、あの時空中に

落葉をほうり投げた！ 落葉は私たちのまわり
ころがり落ちてはひらひら揺れて、
ゆったり落ちる滝の水のようだった。戦前、
ジョンソンの池が住宅地に降参する以前のことだ。
二人で手に手を取り合ってハムデンを
歩いた時のことだ。湿った空気に
落葉の燃える匂いがした。
6年後に私は52才になる。

7

私は今倒れ、今飛びあがって倒れて 落葉が
体の下でつぶれるのを感じる、体が
落葉の大海の中に浮かぶのを、落葉の夜を、
死と落葉でうねって 大海のように揺れる夜を感じる。
おお 落葉の腕の中への、
落葉の柔らかい膝の中への 甘い落下！
顔をしたにむけ、羽毛のような落葉の中に泳いで入ってゆく、
かえでのぴりっとする匂いを吸い、長くすべって
10月の底に急降下する ——
そこでは農地は冬にむかってさざ波をたてて横たわり、スープが
玉ねぎとにんじんの息を
湿ったカーテンと窓にむかってふきかける。窓のむこうには
葉を落とした高いかえでの幹と枝が見える。
風雨にさらされて褐色になった葉数枚だけになっているかしの木と
緑を持ちこたえているとうひの木が見える。
今跳びはね 倒れ 大喜びをして、
死者たちと一致して死から 死によって
もう一度葉の匂いを取りもどす、
落葉の物語の中に
いるという楽しみを、唯一の楽しみを取りもどす。

牛に荷車をひかせて

毎年10月になると
彼は褐色の畠から掘りおこしたじゃがいもを数える、
種子いもを数え、
穴倉にたくわえる分を選びわけ、
残りは袋にいれて 荷車に積む。

4月に刈った羊毛、蜜の
入った蜂の巣、亜麻布、鹿皮を
なめした革、
炉の火を使って手でたがをはめた
樽一杯の酢、これらをみんな積みこむ。

彼は牛の頭のそばを歩き 10日かかって
ポーツマスの市場に着いて いもを売る、
いもをいれた袋、
亜麻の種子、かんばの木で作ったほうき、かえで糖、がちょうの
羽毛と紡ぎ糸を売る。

荷車が空になると 荷車を売る。
荷車が売れると 牛を売る。
引き具もくびきも売って 歩いて
帰る、塩を買い
税金をおさめるためのお金でポケットは重い。

家に帰り 寒い11月に火のあかりのそばで、
小屋にいる翌年の牛のために
新しい引き具を縫い、
くびきを作り 板をひいて
もう一度荷車を作る。

馬たちの名前

冬中お前の肩はとねりこのくびきの上の当て布と
牛革と首当てを強く引っ張ってそりを動かし、
春から夏にかけて乾かすまきと、
次の冬の暖房と料理のためのまきを選んだ。

4月お前は畠にまく堆肥を荷車一杯引っ張った、
ホルスタインの黒い堆肥だ、そしてお前自身のかたまりはオートムギで
 おおわれていた。
お前は夏中草原と牧草地の草を刈り取った、草刈り機がそばで
ぶんぶんうなり、午前の太陽は歩いて高くのぼった。

昼の暑さのあと、同じ所を爪のついた熊手を引いて
干し草の山を集め、その山から山へ荷車を引っ張り、
干し草だがいっぱいになると、坂を上ってもみがらで一杯の納屋まで
 運んだ、
朝の刈っていない草から一日荷車3台分の干し草を作るのだった。

日曜日には軽い荷を積んだ革の幌馬車を早足で2マイル走って
教会に運び、賛美歌を聞きながら草を食った。
何世代にもわたって、お前の首は馬小屋の窓台をこすり、
海がガラスをなめるように、木をなめらかにした。

老いて足が悪くなり、草を食うために肩を曲げるのも苦痛になった時の
ある10月、お前に食べさせ、飼い、毎朝馬具をつけていた男が
とうもろこしの刈り株畑を通して、お前をイーグル池の上の砂地に連れ
 てゆき、
皮ふを震わせて立つお前の横に穴を掘り

耳のうしろの骨のない凹みに銃口をあて、

脳に弾丸を打ち込んでお前の墓に打ち倒し、
シャベルで砂をかけ、その上にアキノキリン草をおいた、
次の夏まで地面の凹みがお前の記念碑になった。

死んだ馬たちの牧場の中で150年の間に
松の木の根がお前の湾曲した蒼白な肋骨から出てくる、
黄色い花が秋にはお前の上に茂り、冬には
大地の中の骨を霜が待ちあげる——良く働いたなつかしい者たちよ、土
を作る者たちよ。

おお、ロージャー、マックレル、ライリイ、ネッド、ネリイ、
チェスター、レディ・ゴースト。

TRANSLATIONS

Translation of Donald Hall's Poems

Yorifumi YAGUCHI

The letters of C. L. Dodgson from *Lewis Carroll*
and the House of Macmillan

Kumiko TAIRA